

75

脾肝薬王圓と『小児養育金礎』

—京都の薬屋石田家の売薬業と育児書の頒布—

梶谷 真司

東京大学大学院総合文化研究科

石田家は、江戸時代の文化年間から大正時代にかけて、鼎貫、勝信、勝秀の三代、百年以上にわたって続いた京都の薬屋である。石田家の売薬業は、初代の鼎貫が丹波から上洛してから始まる。「脾肝薬王圓」は彼が文化4年(1807)に生み出した秘伝の看板商品であり、そのおかげで石田家は大いに繁盛した。『京羽二重』という当時のガイドブックにも掲載され、江戸末期には東北から九州まで、明治になると北海道にまで販路を拡大し、京都でも屈指の薬屋となった。

この大成功を可能にした要因の一つは、『小児養育金礎』という育児書の頒布にあると考えられる。脾肝薬王圓は、小児の病に広く効く薬として売り出され、この育児書はその能書き・宣伝と育児の心得をうまく融合する形で、文化10年(1813)に初版が書かれ、以来明治34年の最終版までずっと無料で配布された。本が高価で誰でも手に入れられるわけではなかった時代に、このような販売戦略は破格であったにちがいない。そしてそれは、石田家が世に出した薬と育児書の両方に特異な性格をもたらすことになった。

第一に、脾肝薬王圓について言えば、育児書のなかには、子育ての心得以外に、薬を生み出した鼎貫の経歴、その誕生秘話、詳細な効能と用法、販売拠点などが記されており、石田家や薬についてさまざまなことを知ることができる。そしてこうした内容的な充実による宣伝効果と、無料の本という魅力が相まって、薬の売り上げと家業の興隆に結びついたのであろう。

第二に、『小児養育金礎』は、市井の薬屋によって書かれた育児書であるという点で、江戸時代では他に類例を見ない。当時育児書と言えば、ふつうは医者なり学者なり、その道の専門家が著すものであった(今でもおおむねそうである)。それゆえにまた、著者のスタンスは、無知な人々に専門家が教え諭すという一方的な啓蒙になることが多い。しかし、『小児養育金礎』は、薬屋が能書きを兼ねて書いているため、より実用的でサービス精神に満ち、読者である民衆への接近、橋渡しという性格が強い。またそれは、薬とともに全国に広まったことで、おそらく江戸から明治にかけて、もっとも広く読まれた育児書になったと思われる。

さらにこの育児書は、江戸から明治にかけて改訂を繰り返し、とくに明治になって、西洋近代医学の影響のもと内容的に大きく変貌した。それはたんに本の記述の変化にとどまらず、身体や病気・健康に関する考え方の転換であり、それに対応して薬の効用や位置づけまで変えることになった。

とはいえそこには、脾肝薬王圓という同じ薬と一体になっていたがゆえの連続性も見られる。このようなことは、他の育児書の内容が、西洋化により、著者もろともがらりと入れ替わるように一変したことと、きわめて対照的である。石田家は、西洋化の波にさらされながら、薬屋という同じ家業を継承しつつ、一つの薬とともに育児書を出し続けた。そこには、それまでの延長線上で何とか歴史の流れに適應しようと苦闘する姿が見られる。

本発表では、『小児養育金礎』の諸版の記述を手がかりに、以上のような脾肝薬王圓と石田家の売薬業の成立と進展、および身体、病気、健康、薬についての捉え方の変化について考察する。